期待の若手シリーズ

私にも言わせて！ 第148回

研究者から公衆衛生医師へ転向し 隠岐諸島の健康を衛る

私が公衆衛生の世界に入って8年がたちました。このたびありがたくも執筆の機会を頂きましたので、これを機に自分自身のこれまでを振り返ってみたいと思います。

島根県隠岐支庁
隠岐保健所長
岡 達郎

2002年島根医科大学（現島根大学）卒業。2003年島根医科大学大学院博士課程入学。2008年島根大学医学部解剖学講座助教、2017年島根県入職。出雲保健所、島根県庁医療政策課などを経て2023年4月より現職。博士（医学）。

県職員になる前

私がもともと医学を志したのは、子どもの頃より発語がスムーズにできない「吃音（きつおん）」を抱えていたことから、中高生の頃には、発語メカニズムを解明したい、言語や運動の障がい・疾患で苦しんでいる人の役に立つことをしたい、という気持ちが芽生え、医学部への進学を決断しました。

順調とはいえない学生生活で数年遅れましたが、同期の仲間に恵まれて、どうにか医学部を卒業しました。当時（２００２年）は臨床研修制度義務化の前でした。進路についてはいろいろと迷いましたが、結局臨床研修を経ずに基礎研究に挑戦しようと、神経解剖学教室の門をたたき、大学院博士課程に進みました。

情動と発声運動に関連する神経回路網の解析をテーマに研究を始めました。出来の良いとはいえない大学院生だったと思いますが、助教として採用していただき、恩師・先輩方の指導のお陰で、学位を取得し、少ないながらも成果（論文）は幾つか残しました。しかし、よわい四十を過ぎたころ、研究者としての自身の力量不足を感じ、このまま大学教員を続けるべきか、別の道を進む方がいいのか、自問自答するようになりました。そんな時に、医学部時代の先輩に相談し、公衆衛生の世界を知りました。直接的に社会・健康に影響を与えるという、公衆衛生のスケールの大きさに魅力を感じ、行政へ転身することを決意しました。

県職員になった後

私が島根県への入職を決断し、採用試験に合格した当時は、社会医学系専門医の島根県版プログラムが認定されたばかりのタイミングで、県の専攻医第1号となりました。

1年目と2年目は、出雲保健所にて勤務しました。研修プログラムにのっとり、指導医の所長と振り返りの面談時間を週に1回つくっていただいたことで、右も左も分からない私を支えていただきました。入職当初は起案、決裁などの文書処理をはじめ、初めて触れる行政の作法に戸惑いました。しかし、4月に行われた県新規採用職員研修に、若手に混ざって参加したことで、なじむことができたと思います。

業務としては、医療監視やＨＩＶ・結核対策などを担当しました。実務に従事しながら、1年目には結核研究所やエイズ予防財団が行う研修に、2年目には国立保健医療科学院の保健福祉行政管理分野・分割前期コース研修に参加させていただきました。科学院の研修では全国の仲間と、公衆衛生の幅広い分野を学ぶことができました。現在でも、科学院の同期が活躍されていることを見聞きすると、うれしく思い、また励みになります。

3年目と4年目は、県庁の医療政策課に配属され、在宅医療、医療計画の中間見直しなどを担当しました。事務仕事については事務職の方に頼ることが多く、負担を掛けたと思います。

5年目6年目は、再び出雲保健所勤務となりました。1、2年目の保健所勤務のときとは異なり、ほぼＣＯＶＩＤ−19への対応が中心でした。夏には第5波（デルタ株）、冬には第6波（オミクロン株ＢＡ・1／ＢＡ・2）、翌年夏の第7波（オミクロン株ＢＡ・5）を経験しました。

それぞれの時期ごとに「全例入院」から「自宅療養が原則」へなど、仕組みが次々と変わり、また感染者数の規模により疫学調査方法も変更していくなど、保健所のオペレーションも目まぐるしく変化していきました。

入院か自宅療養かといった療養先の決定や、療養解除時期など、医学的判断が求められる業務のほか、自宅療養を担っていただいている医師や訪問看護ステーションからの連絡対応等に従事していました。夜遅く帰宅した後でも、自宅療養中の方の急変の相談対応があるなど、睡眠も十分とれませんでした。当時保健所等で勤務していた皆さまは同じ状況だったと思います。

現　在

入職して7年目以降現在に至るまで、島根県隠岐保健所に勤務しています。隠岐諸島は、島根県沿岸からおよそ60㎞北に離れた日本海にあります。大小合わせて、約１８０もの島があり、そのうち人が住む島は4島あります。隠岐諸島は古くから日本海の交通の要衝として栄えました。島前には摩天崖や赤壁など、島後に白島海岸、ローソク島などの景勝地があります。その地質学的価値の高さから、ユネスコ世界ジオパークに認定されています。

管内人口は約1万8千人で、人口規模では全国最小の保健所です。高齢化率は２０２０年には40％を超えており、高齢化では全国の先を行く先進地域です。

隠岐圏域の男性の平均寿命は県に比べて約1年短く、背景として、喫煙や飲酒などの生活習慣の状況に課題があると考えられます。地域の機関・団体等が構成員となっている「隠岐圏域健康長寿しまね推進会議」と連動して、さまざまな取り組みを進めています。また島根県では「しまね健康寿命延伸プロジェクト」を全県で展開しており、各地域で住民主体の健康なまちづくりを推進しています。保健所と市町村が連携して、共に高め合いながら取り組みを進めていければと思っています。

最後に

基礎研究に従事していた時には、個人プレーに近いような働き方でしたが、行政の世界では、チームプレーで動くのが特徴です。医師、保健師、栄養士、獣医師、薬剤師等の専門職と、事務職がチームとなって協力しないと、保健所の持っている力はうまく発揮できません。保健所長になって2年がたとうとしていますが、マネージャーとしては未熟さを感じることも多くあります。組織を動かすことの難しさはありますが、自分の役割は、目立たずとも、保健所の職員や地域の機関・団体等が活躍してもらう「土台」を作ることだと思っています。

これまで素晴らしい職員・上司・同僚に恵まれているお陰で、今日を迎えることができています。皆さまに感謝申し上げるとともに、今後ともご指導ご鞭撻（べんたつ）を頂きますようお願いいたします。

「期待の若手シリーズ　私にも言わせて！」は、全国保健所長会ホームページにバックナンバーが掲載されています。

全国保健所長会　月刊公衆衛生情報　で検索してください

http://www.phcd.jp/update/archive_02_j_koushueisei_watashi.html